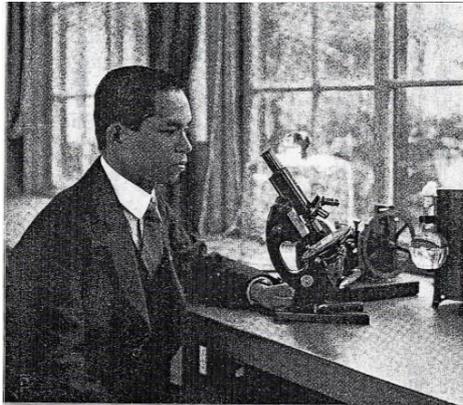


佐藤清明資料保存会会報

No. 4



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会
里庄町立図書館

2019.12.21.

会報第4号 もくじ

1. あいさつ	副会長 杉本 秀樹	1
2. 巻頭論考 岡山博物同好会と佐藤清明	顧問 岡本 泰典	2
3. 巻頭論考関連資料（複写）「岡山博物同好会 30年の歩み」（佐藤清明著）		5
4. 清明先生の思い出	清心なでしこ同窓会元会長 庄司志津子	1 3
5. アーカイブス（清心学園百年史より） 母校の思い出	庄司志津子	1 5
6. 清明さんになった子どもたち		
	夏休み図書館講座『植物標本を作ろう』を開催して	1 7
7. 編集後記		1 7

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

あいさつ

「妖怪講座」を開催したいのです。また、「里庄のせいめいさん展」も開催したいのです。ある日、図書館の職員から報告を受けました。聞いた瞬間、私は何のことやら全く理解できませんでした。本当に恥ずかしいことなのですが、じっくり聞いてみると、里庄町出身の方で、素晴らしい業績を残された博物学者がおられることを初めて知りました。その博物学者は、佐藤清明氏でした。当時の私は、佐藤清明氏のお名前は言うまでもなく、幅広い業績、厚子内親王（順宮）のおしるし（紋章）である菊桜との関わりなど、知らないことばかりでした。

そこで私は、以前に読んでいた里庄町誌を見れば、佐藤清明氏のこと載っているのではないかと思います、さっそく開いてみました。先生のお名前が随所に見られ、その偉大さの一端を知ることができました。そして、いろいろな方から佐藤清明先生について教えていただく機会が増すにつれ、自分自身が佐藤清明先生の業績等について、しっかりと勉強しなければならないという思いを強くしました。

その後、「清明研究会」が立ち上がり、今では「佐藤清明資料保存会」と会の名称を変更して活動しています。大変ありがたいことに、現在も会の立ち上げに携わられた多くの皆様や、佐藤清明先生のご親族を始め、各界の関係者の皆様方による献身的なご支援をいただいているところです。膨大な資料の収集や整理、各種の勉強会や研究会など、実に意欲的に、そして精力的に活動していただいています。心からの敬意と感謝の念でいっぱいです。

資料保存等に一定の目途が立つのに、約10年を予定しています。これからさらに調査や研究を進めて行くにつれ、困難なことにも出会うことと思います。会員の皆様や関係の皆様方と共に、知恵を出し合い、心を寄せ合いながら、素晴らしい先人の業績を顕彰し、後世にきちんと伝えていくことが大切であると考えています。会員の皆様、ご支援やご指導をいただいております関係の皆様、そして町民の皆様方に、今後とも温かいご支援やご協力を、心よりお願い申し上げます。

令和元年12月

佐藤清明資料保存会副会長
里庄町教委育委員会教育長 杉本 秀樹

岡山博物同好会と佐藤清明

顧問 岡本 泰典

はじめに

従来、佐藤清明の業績としては『現行全国妖怪辞典』や牧野富太郎との交流など、もっぱら戦前の事績が注目されてきた感がある。しかし、1905年（明治38年）生まれの佐藤は終戦の年にちょうど40歳で教員としてはベテランの年齢に達し、その後は岡山県文化財保護専門委員、倉敷市文化財保護委員などの要職を歴任し、社会人・教育者としての本格的な活動はむしろ戦後になされたといつてよい。佐藤の業績を語る上で、とかく見過ごされてきた戦後の活動にも、改めて注目する必要があるだろう。

今回の発表では、戦後における佐藤の主要な活動の一つといえる「同好会の結成と運営」について、現時点で筆者が把握している事柄を紹介したい。ただ資料不足の感は否めないため、誤謬の訂正や関連情報のご教示をお願いする次第である。

岡山博物趣味の会

佐藤は、戦前の昭和10年代に「岡山博物趣味の会」という団体を運営している。この会については有力な情報を見つけ出せておらず、存続期間や活動内容の詳細は不明であるが、とりあえず把握できた情報に憶測を交えて紹介することとする。

佐藤家資料にあった、同会の設立趣旨を記した文書によると、同会は博物趣味愛好者に広く門戸を開き、「自然愛好の念慮を深めその神秘に触れる」ことを趣旨としていた。相談役は第一岡山高等女学校の井上清一はじめ6名、世話役は金川中学校の宗田克己はじめ9名で、佐藤は世話役の一人に名を連ねている。ただし、会の事務所は岡山市内山下石山の佐藤清明とあり、実質的に佐藤が運営実務を担っていたと考えられる。会の活動内容としては、採集会・見学会・座談会・講演会・展覧会・研究会・その他の7項目を挙げている。主要な活動のひとつに、岡山天満屋における「趣味の博物展」があり、第1回は1937年（昭和12年）に開催されている。

博物趣味の会の発足の契機として、筆者は次の2点を考えている。第一に、佐藤が1923年（大正12年）から翌年まで勤務した第六高等学校では、1903年（明治36年）に大渡忠太郎教授が中心となって岡山博物学会が設立されており、佐藤がそれに触発を受けた可能性である。第二に、1930年（昭和5年）に行われた「生物採集動員」に、県内から多数の教員が各自治体の委員として参加したことを契機として、県内の動植物研究者の交流が深まったことである。

このほか佐藤家資料には、「趣味の博物展」や、1937年（昭和12年）7月27日に行われた第一回昆虫採集会などの写真があり、戦前の博物学研究の歩みを語る上で貴重な資料といえる。さらに博物趣味の会は、1940年（昭和15年）6月2日に「高島聖蹟」調査の一環として、児島湾に浮かぶ高島の植生調査を実施している。佐藤はその結果を『参修高島考』に掲載し、植生の概要や特徴的な植物を紹介している。

博物趣味の会の終焉の時期や理由は定かではない。おそらく、昭和10年代も後半にな

り戦時色が濃厚になるにつれて、博物学研究などに費やす余裕はなくなり、会も休止を余儀なくされたのではないだろうか。そのような短期間とはいえ、このときの活動経験が、戦後の岡山博物同好会などの運営において発揮されたと考えられる。

岡山博物同好会（前期）

戦後間もない1945年（昭和20年）12月、倉敷市の大原農業研究所に、16名の研究者有志が結集し、岡山博物同好会が誕生した。活動内容や推移については佐藤の「岡山博物同好会30年の歩み」に詳しいので、同文献に依拠しつつ記述を進めることとする。

発足時のメンバーには西門義一（植物病理学）、深谷昌次（昆虫学）ら大原農業研究所の研究者をはじめ、のちに岡山県の昆虫研究や自然保護活動に活躍する重井博や黒田祐一も名を連ねている。会長には「博物趣味の会を数年続けた」という理由で佐藤が就任した。会の主な活動内容は、例会、大会、採集会、虫供養、懇話会、会誌発行、そして「学徒博物コンクール」であった。

例会・大会では毎回、各分野の研究者による講演が行われた。たとえば1946年（昭和21年）10月6日の第10回例会では、山川東平「薬用昆虫について」、高橋小太郎「金浦湾のカブトガニについて」、佐藤清明「岡山県の古生物」の3本の講演があった。戦前から佐藤と親交があった高橋は、カブトガニの生体を会場に持ち込み、自身が手掛けたカブトガニの産卵の研究成果について説明した。

採集会は神庭の滝、伯耆大山、臥牛山、笠岡の海岸などを会場として、会員のみならず一般にも広報して多数の参加者があった。笠岡では高橋小太郎が講師を務め、当時は海であった笠岡湾でカブトガニの産卵を直に観察したという。

虫供養は本会のユニークな活動の一つで、昆虫採集や害虫駆除の犠牲となった諸虫の霊を慰めるために開催された法要である。倉敷市の観龍寺を会場に、虫の位牌（普天諸蟲之霊）を作り、現役の僧侶たちによる読経を行い抹茶席も設けるという充実した内容であった。

学徒博物コンクールは本会の活動の特徴づけるもので、小学校・中学校・高等学校生徒による博物学（生物・地学）に関する研究成果発表の場となった。一等の「大原賞」は賞金1万円と棟方志功デザインの賞状授与、審査員も岡山県内在住および出身の各界専門家10数名に委嘱するという充実ぶりであり、これも大原財閥の全面的な支援の賜物であろう。佐藤家資料に含まれる川村多実二（動物学）、小林晴治郎（寄生虫学）、大賀一郎（植物学）らの書簡にも、コンクールの採点に関するものがあり今後の調査が待たれる。このコンクールには毎回50題前後の発表があり、県内のみならず近県からの応募もあって、「西日本のノーベル賞」と言いはやされた。

こうして数々の行事を盛況のうちに挙行し、発展を続けるかに思われた同好会であったが、数年のうちに取り巻く環境が徐々に変化し始める。まず1947年（昭和22年）に、農地改革により大原農研が財産の農地を失い、さらに研究所自体が岡山大学に移管され、1953年（昭和28年）に解散したことで、大原農研に本拠を置く博物同好会の活動が困難になった。また主要メンバーの多くが岡山県外に新たな職を得て転出したことも活動に支障を招いた。そのため、機会を見て再開することを念頭に置きつつ、いったん会の活動は休止することとなった。確認した範囲では、1953年には学徒博物コンクールが開催されているようなので、活動休止はこの年ないし翌年であったと考えられる。

岡山博物同好会（後期）～岡山県自然愛護協会

1967年（昭和42年）、国際生物学事業計画の一環として、文化庁の主導により各県の植生調査が実施された。佐藤はこの調査の委員に任命され、県内研究者たちの協力を得て短期間のうちに植生図を作成、公表した。この調査を機に、自然愛好者間の親睦を深めようという機運が盛り上がり、井原市在住の三宅一喜が中心となって翌1968年に「岡山博物同好会備西支部」が発足し、機関紙『備西の自然』の刊行も始まった。ここに、岡山博物同好会が10数年ぶりの復活を果たしたのである。初代会長は佐藤であるが、実際に運営を取り仕切っていたのは三宅であったと考えられ、後に三宅は第2代会長に就任している。

5年後の1973年（昭和48年）には、三宅らの努力により会員数は370名に増加し、会員の居住地は県下7市11郡（当時）に及んだ。岡山博物同好会備西支部という名称も現状にそぐわなくなったため「岡山県自然愛護協会」と改め、会誌も『岡山の自然』へと改称がなされた。同誌や新聞記事によれば、同会は県内の自然観察会、植生調査、県内外の天然記念物現況調査、独自の資格「自然保護士」の育成など多様な活動を行っている。ただ、県内の他の研究会・同好会との繋がりはいまや強くはなかったようである。

同好会の活動の一環として、先日『ファミリーヒストリー』でも紹介された、井原市芳井町の「早川のカヤ」の調査について紹介したい。同会の会誌『備西の自然』によれば、1968年（昭和43年）8月4日、博物同好会の第1回例会が旧芳井町を含む井原市内で開催され、その際に「早川の大榎」の調査が行われた。調査結果の重要性を考慮してか、さっそく同年9月29日の第2回例会において管理者に佐藤名義の認定証の交付がなされた。当日の認定式では公民館長の記念講演や町教委指導主事の祝辞も披露されたという。その後1980年（昭和55年）に本榎は芳井町の天然記念物に指定され、井原市との合併に伴い2005年（平成17年）には井原市指定となっている。なお認定証も現存するが、個人蔵のため非公開となっている。

現在、岡山県自然愛護協会の活動は確認できておらず、平成に入っていずれかの時点で休止状態になったのではないかと思われる。同会名義の出版物は、岡山県内図書館横断検索で確認できた限りでは、2006年（平成18年）の『全国の調査巨樹順位』が最後である。これをもって、佐藤に直接連なる同好会活動は終焉を迎えたといえよう。

おわりに

戦後における佐藤の活動は、今回取り上げた博物同好会の運営をはじめ、県内各自治体の天然記念物調査など、どちらかといえば公的な性格が目立つ。多くの研究者と交流をもち、民俗学・自然史双方で調査・執筆に明け暮れた戦前期が「私人期」とすれば、公的活動が中心となった戦後は「公人期」とでもいえよう。自由闊達な私人期に比較して、戦後の公人期がやや地味に映ることは否めない。しかし、岡山博物同好会による学徒博物コンクールや天然記念物調査が、若手研究者の育成や各自治体の文化財指定に貢献したことは間違いなく考えられ、その意義は決して閑却できるものではない。

幸いにも、佐藤家から里庄町に移管された資料には戦後期のものが多数含まれ、最近では渡辺義行氏から天然記念物調査報告集も寄贈された。これらを貴重な材料として、佐藤の戦後期における諸活動が明らかにされ、その全生涯にわたる業績に等しく光が当たることを期待している。

「岡山博物同好会 30年の歩み」 佐藤清明著（昭和50年5月18日発行）

会の創立

今から丁度30年前、それは昭和20年12月27日に岡山博物同好会は誕生した。岡山市が空襲をうけて死者1,700人、焼失家屋25,000戸を算したのは、その年の6月29日であった。その後1か月で広島に原爆が投下され、投下後9日目には終戦の詔勅が放送せられ、そして10月には進駐軍のアメリカ兵3,000人がドッと岡山を占領し、11月には農地改革が行われて小作農は自作になった。そういう時に、混沌たる廃虚の中に同好会は小さな芽を出し、立ち上ろうと期したのである。当時の同志の宣言は次のようなものであった。

何年も続いた戦争のあとに冬は訪れて今や新しい春を迎えた。ほんとうに新しい春である。

荒れ果てた野原には枯れた草や、焼けた家が痛ましく散って居る。

しかし、その痛ましい中から小さく萌ぐんで居る若草の子葉は見つけられないであろうか。

岡山博物同好会は、その弱小なる唯一株の雑草の子葉である。大自然の恵みによって、いまこの世に生を受けた。成長しようと念願して居る。（岡山博物同好会々報第1号巻頭の辞より、仮名づかい当時のまゝ）

当日倉敷の大原農業研究所に集まったのはタッタ16人、その中には西門義一、深谷昌次の両博士（ともに今は故人）、小泉憲次、重井博、黒田祐一、中山隆夫、小阪和彦、大島俊市、三宅輝武の諸氏がいた。前に岡山博物趣味の会というのを岡山市で数年間つづけたというので私が否応なしに会長にまつりあげられたが、それから今日まで実に30年、幸か不幸か私はこの会を負うて立たされる因果な運命を引きあてて来たのである。

しかし、その時にジッと微笑んで会をみて下さった影の人として、会の背後には大原総一郎氏が控えていた。その後、たびたび大原氏を総裁という名で戴こうという議が出たが、いつも自分はソッとしてほしいと辞退され、そしてコンクール（後出）には出てきて豪華な大原賞を手ずから渡して下さるのであった。

本会の創立は早速マスコミにも連絡し、創立の会合の席には山陽新聞の熊丸米庵支局長（いまは故人）を招き、その記事は翌日の山陽新聞（当時は合同新聞といった）に出た。また、夕刊岡山という新聞にも出た。それらの切り抜きは私が今も保存している。

当初の会則

昭和20年（1945）、本会創立のときに作った会則はいささか特色があるので次に掲げさしても

らう。

岡山博物同好会々則 (昭和20年)

1. 本会は岡山博物同好会と称す。倉敷市大原農業研究所に事務所を置く。
2. 本会は岡山県を中心にして博物文化に関する諸研究を自由に行はんとす。
3. 以上の目的によりて随時例会を開き研究、討論、採集其の他の事業を行ふ。
4. 職業、地位、年令、国籍の如何を問はず総べて博物文化を愛好する者は本会に入会するを得。
5. 会員中より役員を公選し、会長、幹事を設け、更に顧問を推戴す。
6. 会費は当分の間、会員より入会金5円を収めて之に充当す。
7. 其他の細則は例会の席上にて会員議決するものとす。

(仮名づかい当時のまゝを掲げた)

そして、これには、ご念入りにも次のような英文もつけた。その後に外国人も会でたびたび関係をもったが英文の会則はその都度、面目(?)をほどこしたものであった。

The Rules of the Okayama Biological Society.

1. The organization shall be "The Okayama Hakubutsu Dokokai" - "The Okayama Biological Society" and shall establish its office at the Ohara Institute for Agricultural Research in kurashiki.
2. The Society shall conduct studies freely on the subject of biology having nucleus at Okayama Prefecture.
3. With the above purpose, the Society shall hold regular meetings at appreciate time and shall study, discuss, collect specimens, etc.
4. The Society shall be open to all who have interasts in biology, and this shall not be limited by the occupation, status, age nor nationality.
5. The office of the Society shall be elected from the members. The officers shall be a president, and secretaries with appointed advisors.
6. A fee of 5yeh shall be collected from the members at the time of admission to supply the needs of the Society

for the time being.

7. Other details of the rules shall be decided by the members at the regular meeting.

会の事業

昭和20年に始めた岡山博物同好会は会員の熱烈な支持によって会則にうたった諸行事を矢つぎばやに実施し、7年後の昭和27年3月発行のパンフレットでは初めの7年間だけで次のような事業を催したことを記録している。

岡山博物同好会の事業行事（昭和20～27年）

例会の開催 39回

初めは毎月例会を開いた。戦後で食糧難の折柄、笠原、小泉、小阪の諸氏は小麦粉を手に入れ毎回、手製のパンを焼いて来会者に配った。第4回例会では朝鮮から復員して来た小坂弘氏や、学位を得た岩田二郎氏（その後、間もなく喉頭ガンで死去）を招き、第5回例会では小泉憲次氏がヤマトビカの大群を見た話をし、次いで氏は新に出来た高松農専の教授になった。第6回には守山鴻三氏の鳥の話に興じた。第11回例会には吉野善介氏を招いて数々の新種を発見した追憶談を聞き、第12回には小林晴治郎氏の寄生虫学、第13回は高橋竜平氏のムギのゲノム分析、第16回は長く台湾昆虫界につくした楚南仁博氏を迎え、第17回は西門博士がスカンジナビアの旅を紹介した。第18回は農学賞を得た深谷昌次氏の二化メイチュウ、第19回は倉敷商工会議所で一般公開のもとに安田勲氏の花の来歴等を聞き、第20回は当時、米倉の天皇陛下に御覧に供した標本を私から披露した。第22回は天皇に進講された西門博士に再演してもらい、また日下部台五郎氏から内海の水産を解説してもらった。第23回は市民に公開して家庭園の果樹野菜病虫害全般をそれぞれの専門講師に手引を依頼、第25回は小林純氏が沖縄の自然をスライド上映し、第27回は郷土の産んだ大博物学者の列伝と題して私が担当した。

大会の開催 3回

例会の少し規模の大きいものを年に1回催おした。第1回大会は岡山県の博物というテーマで8人の講師が語り、第2回は会員150人になった記念に江崎悌三、小林晴治郎、春川忠吉等の先輩を迎えて講演を願った。それは昭和22年のことで食糧難の折柄、3人の講師にはお米を1包お礼に差し上げて喜ばれたのも思い出の種で、その3人の方もすべて今は故人である。第3回は市民に開放して衣食住の科学とし衣服（大島俊子）、住居（玉井伊三郎）、食物（駒沢利雄）等を講演して好評を拍したが各講師とも今はみな故人である。

採集会 10回

神庭の滝、 伯耆大山、 美作三湯、 阿哲峽、 笠岡海岸、 高梁の臥牛山等にしばしば採集会を行ないこれは公開して一般から多数の参加を得た。

阿哲峽のときには絹糸滝でムカシトンボを得て記録を作った。大山のときは阿弥陀の滝で雷雨にあい、滝の上の崖においた管瓶をそのままに下山して中の折角の採品を忘れて失敗したこともあった。笠岡では高橋小太郎氏がカブトガニの産卵を現地で研修させていただいたのは今となっては歴史的な体験であった。

虫 供 養 6 回

学問の犠牲になった尊とい虫の霊、産業や技芸に捧げたカイコの霊、薬品で駆除されたり誘蛾燈で葬られた害虫の霊をはじめ、虫に限らず無脊椎動物、細菌、ビールス、酵母、または魚貝、脊椎動物、洋の東西、時の古今を問わず普天諸虫の霊のために供養を催おすという主旨で、倉敷の観音寺で昭和23年1月7日に第1回虫供養を行ない、一般にも参加を呼びかけ、虫の位牌を作り、導師として村田俊学、嶋谷円明、井上覚道、太田豊成、村田文英、竹井春雄の諸師に読経を願ひ、藤本実、服部忠志、中西稻影、生咲義郎の諸氏の献詠、協賛抹茶席を甘露庵に設けた。第2回には湯浅啓温、松本鹿蔵、岡本大三郎氏の昆虫^等大家が参加、第3回にはD. D. T. 関係、第4回には参加者が増加して原澄治氏が多額の香料を供えて列席され、倉敷市役所の担当課長諸氏が来会、吉田一葉師の献華等が加わった。

懇 話 会 5 回

会の運営を討議するために懇話会を開き、昭和23年3月には、それまでに講演して下さった講師、来賓を笠岡海岸に招いて採集をかねて会食したのを始めとして毎年1回行なった。

会誌の発行 8号

会誌といっても当時は戦後で紙がサッパリ手に入らず、簡単なザラ紙に謄写プリントにしたものばかりであったが、またそれだけに却って手軽にできた。例会などを公開して市民講座のときはパンフレットのテキストを作って配ったが、それを作るのもまたそれなりに楽しくもあり、勉強にもなった。

そ の 他

会の成立直^前米国のマッカーサー将軍が日本に進駐して、その本部をG. H. Qといった。そのスタッフに天然資源局長官シェンク中佐(スタンフォード大学古生物学教授、故人)がいた。私は若い時にこの人から手紙をもらって標本の交換をしたことがあったので、早速上京して訪ね、会としての要請をしたり、日本の博物界の現状を語ったりした。

昭和22年12月には天皇陛下が倉敷へおいでになり有隣荘へ御滞在になって県下各地の戦災を見舞われた。そのとき、何か生物学に関する標本などをお目にかけて徒然をお慰めして

はという県の依頼があり、私は同好会の方々にはかって岡山県の昆虫標本2箱25種を作り、会員の採集品を収めて御滞在在中、ずっと御座右において頂いた。ところが12月8日にはそれについて御下問があり、私は有隣荘におもむいてじかに奉答した。

昭和24年4月、東京の読売会館で読売新聞主催の東京昆虫祭があって全国から研究発表を募ったので同好会からもこれに参加し最高位の第1位と第2位は全部本会の選手が独占し、第3位福岡、第4位東京という順位になった。その年に岡山で博覧会があって、皇太子さまは学習院高等科1年生として修学旅行のお気持ちで御来岡になり博覧会を見学遊ばされたので、本会では殿下とはほぼ同じ年配の読売で1位になった倉工生徒の小野洋、青野孝昭君、それに読売で2位の可愛らしい小学校5年の永広紀子さんの作品を陳列し、殿下のおいでを待ってご説明申しあげたこともあった。これは毎日新聞がスクープして特種になった。

昭和28年10月、天皇が池田動物園においでになったとき、本会ではまた生物の標本9種を作りお目にかけた。それにはハンザキ、カブトガニ等の発生標本、淡水海綿、岐阜蝶、ヤマセミ等、県下の各動物を網羅してあり、陛下は興味深く御覧くださった。淡水海綿の標本は美事なものでそのまま津山の科学博物館に今も陳列してもらっている。

博物コンクール

毎年1回、秋に学徒博物コンクールというのを開き優秀な研究を発表してもらい、1等には大原賞というのを出した。それは現金1万円と、棟方志功のデザインになる豪華な賞状を額に入れて研究者と学校とに贈り、続いて知事賞、教育長賞を県から出してもらい、地元からは倉敷市長賞、山陽新聞社賞も頼んだ。略規の中に「審査は斯学の権威者が厳正にされるのですから、その結果について後から抗議等は勝手ながらお断りします」というのがあって、これを承知で応募したのでトラブルは全くなかった。審査員は岡大から猪野俊平、大江二郎、浦良治、春川忠吉、西門義一の諸教授、郷土出身から大賀一郎、川村多実二、小林晴治郎、それに岡田弥一郎、堀川芳雄、山本一清、深谷正次、本田実の諸先生をお願いした。先生がたは皆さん喜んで審査してくださり、数人の方はコンクールの席上に来てくださって親しく審査の所感を述べられた。

第1回は昭和23年に開き、六条院小学校5年、永広紀子、第2回は倉敷高校1年、陶守保義、第3回は津山林田小学校6年、能勢房子、第4回は愛媛大学付属中学3年、角田晴信、第5回は松山南高校3年、大政さつき等の諸君が最高賞をからとられた。

このコンクールは毎回50題前後の発表があり岡山県下はもとより、聞きつけた広島、鳥取、愛媛、香川の近県から申込があって学生間では西日本のノーベル賞だと言いはやされた。

会のその後

同好会は昭和27年頃までは年々隆盛におもむき、その発展は山陽新聞（当時は合同新聞と呼んだ）の社説にも取りあげられて最も活躍している頼もしい会であるとはめられた程であった。ところが好事魔多しで、その頃から会の続行が困難になった。それには3つの原因が重なったのである。第1に会の本部である大原農研がなくなって国立の岡山大学に吸収され組織が根本から変わったことであった。当時の杉山所長も何とかして会を元のままに残すようにお骨折りくださったけれどもそれは理屈どおりにはゆかぬことが判った。第2に会のスタッフの殆んどが倉敷をはなれて他の地に転任されたことである。深谷氏は西ヶ原へ、小泉氏は神戸へ、小阪氏は四国へ新天地に雄飛されて連絡が阻害された。第3に財閥解体の風潮から大原家も倉レや倉紡の特殊位置を離れ従来のように京都の本邸に私が出向いて我が儘なお願いをすることが遠慮せねばならなくなった。

そこで会は一先ず休会にし、農研には従来から関係してくださっていた高橋、小沢、笠原、安江、日浦の諸教授もおられるし、いつでもまた再開できる体制のままで会の活動を一時停止する形となった。

会の現状

昭和42年のことであった。当時、国際生物学事業計画（H. B. P.）が5か年計画で実施され国土の植生調査ということが必要になって日本でも文化庁の仕事として、その年を初年度とし継続事業としてこの大調査をすることがきまり、岡山県は青森、宮城、神奈川、愛知、広島等の諸県とともに第1年次に植生調査を強行した。私はその時、調査委員にせられたが、とても一個人の力で県下全般を僅か1年間に調査することは不可能なので、県下各地から20人の方をお願いして天然記念物緊急調査員になってもらい、その方々の熱心なご協力によって、予定通り短期間に植生図を作成公表することが出来た。調査員の方々は直接、間接に博物同好会に関係された方が多く、活動を休んだ会が思わぬところで大事業の原動力となったのであった。緊急調査がすんで文化庁の計画は本県に関する限り一応解散になったが、これを機会に今後も親睦を続け深い関係を持つという機運がおこり、備西地区の緊急調査を担当してくださった三宅一喜氏はまっ先にこれを実行に移して岡山博物同好会備西支部を作り本会を再興して往年の盛時に達するのを目標に周囲に働きかけて昭和43年、同志30名で機関誌、「備西の自然」を発刊し井原市から呼びかけ、非常な熱意を以て次第に活動圏を四隣に拡大してゆかれた。

そして、昭和48年、その5周年にあたっては会員370名、県下7市11郡にわたり、総会を開くこと14回に及んだ。もはや名実ともに備西支部どころではなくなり、岡山博物同好会の後身とし

て会誌も第6号からは「岡山の自然」と改め、なお会員ももう「博物」という古典的な言葉では若い世代の同好者には理解されないのではないかという心使いから、岡山県自然愛護協会という新名を設けたが、一方では荣誉ある歴史をもつ旧名も棄て難く、暫らく2つの会名を併称して新人、旧人いずれの人にも愛してもらえらる会としようということになっている。会の現状については詳しいことは今更この文末に下手な紹介をする要もないので、以上ただ思い出すままに本会30年の歩み、殊に草創の頃の雑事をしるしてご参考にした次第である。

付．博物という言葉

博物同好会の博物とは一体何のことか、今は博物という言葉にあまり馴染みがないが、明治、大正から昭和の初めにかけて博物という言葉はよく使われたものである。明治33年に東京の府立一中の生徒が作った会に日本博物学会という同好者の会があった。「博物の友」という機関紙を発行した。1年後には会員が3人から160人にふえた。石川光春（一高教授、植物学）、武田久吉（高山植物）、内田清之助（鳥類学者）、矢野宗幹（昆虫学者）、寺尾新（カニ類）、三宅恒方（昆虫）、東道太郎（淡水藻）、高野鷹蔵（高山蝶）、小熊稔（染色体）、木下周太（昆虫）、駒井卓（遺伝学）、小原亀太郎（遺伝学）、山川黙（蝶類）等の生物学者はこのグループから成長した。

博物という言葉はズッと常用されて、それから30年後、三省堂発行の「博物辞典」の巻末付録をみると、当時は日本には博物学界や博物同好会が花ざかりで、札幌博物学会（北大）、東京博物学会（東京文理大）、大阪博物学会（阪大）、広島博物学会（広島文理大）、福岡博物学会（九大）、朝鮮博物学会（京城大）、台湾博物学会（台北大）等があり、みな厚い会報（レポート）を発行して、岡山にもまた岡山博物学会（六高を中心に）があった。しかしそのほとんどが亡びて残っていない。

その時分は中学校や師範学校の理科には博物は必修で、1年生は植物、2年生は動物、3年生で生理衛生、4年生が地質鉱物、5年生が博物通論と分かれていた。諸外国も同様で英米では *natural history*、フランスでは *historire naturelle*、ドイツでは *Naturgeschichte* である。

博物という熟語の出所は春秋左氏伝にさかのぼり、2000年前、周の時代、孔子で名高い春秋の註釈書、春秋左氏伝（魯の史官、左丘明著）に「晋侯、子産の言を聞く、博物は君子なり、重ねてこれを賄ふ」とあるのを初見としている。

表彰者等名簿

○特別表彰状

三宅一喜 井原市東江原町 岡山県立加茂川高校教諭
本会副会長、生物園芸部会長。阿部山研究地委員長で昭和43年4月以来の本会の再建発起人であり組織、企画、事業など全般にわたり総轄し、現在450名の会員を擁し県下第一の自然保護団体に育成するとともに植物の研究調査では県内広く足跡を印し各種の報告を出版するなど、その功績はまことに偉大である。なお昭和48年9月に表彰状をうけている。

○表彰状

兼高末松 笠岡市尾坂 園芸業
本会運営委員、阿部山研究地管理事務所長。昭和47年8月入会以来、第10、16、17回の行事の準備運営に努力し、数度にわたり、三宅副会長の行う植物調査に協力を行う。また昭和49年12月以来、本会阿部山研究地の用地250アールを提供され自らその建設の推進に努力するほか会の組織強化に尽力するなどその功績は高く評価される。

○特別感謝状

松田佐七 吉備郡真備町尾崎 農業
本会備中支部副支部長。昭和46年3月入会以来、短期間に100名以上の同好会を誘い支部結成を行うほか、三宅副会長の行う植物調査に率先、たびたびにわたり協力をする。また、第11、12、14回の行事を準備や運営に努力し園芸技術講習会の講師をつとめるなど本会の発展に貢献した。なお昭和48年9月に感謝状をうけている。

難波源讓 総社市久代 新本郵便局囑託
本会運営委員。昭和47年1月入会以来つねに行事に参加。総社市久代地区を組織し管下の新本地区、備北地区をよくまとめて連絡運営し、三宅副会長の行う植物調査にはしばしば協力するほか阿部山研究地委員として建設作業に尽力した。また昭和49年10月の役員研修会を準備運営するなど本会の発展に貢献した。

清明先生の思い出

清心なでしこ同窓会元会長 庄司 志津子



私は、若いとき 20 年あまり岡山鉄道管理局へ勤めましたが、里庄というところへはあまり行っておりませんでした。清明先生のお宅へ何度か行ったことがありましたので、図書館の小野先生に「家の前に大きな川がありますね。」と言いましたら、「あれは池です。」と教えてくださるほど、里庄のことは何も知りませんでした。

この度、清明先生についてお話しをと御依頼を受け、もっと良いお話しを為さる方が居られるとは思いましたが、清明先生のご恩返しの一つになればと引き受けさせていただきました。

清明先生は、昭和 53 文化功労者表彰。昭和 55 年勲五等旭日双光章を受賞されたお方ですのに全く偉ぶらないお方でした。五月に倉敷で先生の資料展を拝見して初めてこの様な御立派な先生だったのかと知り、私達のような生徒には勿体ないお方だったのだと申し訳なく思いました。

私は担任をして頂いたこともなく、格別優秀な生徒でも無かったので、先生の御記憶に残っていないと思っていましたが、私が遅くに結婚したとき、「友沢さんは（旧姓）結婚せんのかと思っていたが結婚して良かった。安心した。」と私の友人に漏らされたそうです。私の様な者をも心に懸けていてくださったのを知り、驚くと同時に有り難く思いました。

清明先生の回顧録「学園五十年史」によると、北九州の小倉に勤めていたが、健康を害して岡山に帰って来られ、第六高等学校の助手をしていたとありました。……その頃、清心女学校が岡山市上伊福（今の女子大学）に東洋一の立派な学校を建て、理科の教師を探していると主任教授が進めてくれた。しかし何分にも 25 才の独身の青二才では採用してもらえないと思っていたが、すすめられて校長シスターメリーコスカ、副校長のシスターエーメーとお会いした。どんなにむつかしいお婆さんかと思っていたが、お目にかかった瞬間からしたしく優しくその神々しさに打たれて、未だ採用と決定しないのに私は一生ここへ尽くそうという気になった。我ながら不思議だった。シスターも終始にこにこして未だ独身の青二才であるのにお構いなく、私の心の奥まで信用して下さって凡てを任せるという態度で接して下さったのには感動した……とあります。

ですから先生は、昭和 6 年清心女学校が上伊福へ建てられてからの草分け的な御存在でした。私達は長年先生の授業を受けましたが、誠におおらかで点数などに頓着無く校庭の草や花の名を覚えさせられたり世話をさせられたりしました。校外へもよく連れて出て下さり、イナゴやバッタを捕ったりしました。珍しい草を持ってきた者には「秀」をやると言われて友達は山を駆けずり廻って持って行っても、どんな小さな草でも全部名前をご存じでした。教室では蛙のカイボウをさせられて大騒ぎしたこともありました。後年になって、蛙をカイボウする時は救急車を呼んでおかんといけんと言われたそうです。

先生のお授業の話もいつも目を白黒させながら聞いたものです。今に、1日にキャラメルくらいのものを 1 個食べるだけでよくなるとか、今はカラスが「カアカア」啼いているが、何

を言っているか分かんが、そのうちにカラスの言葉が分かる時が来る。食事を作らなくてカレーライスという釘を押したらカレーライスが出て来る時代が来る。先生の御言葉は未だ 100% 実現していませんが、だんだんとそのお言葉通りに近づいてきているのを感じます。

大都会の有名な学者ではなく、里庄という一地方の中から時代を先取りした先覚者が現れたということは大変な出来事だと思います。

先生は、池田厚子様のお印の菊桜を育てられたり、学生たちと大山に行かれたとき、一匹の新種のハエを発見され、専門学者の小泉憲治博士に「サトウキノコバエ」と命名を頂いたそうです。そのハエは、南米とセイロン島に僅か類似種がおるといふ珍種で、時の天皇陛下に直接ご説明されたそうです。

又、私達の時代に学徒動員で勉強よりも飛行機作りやミシン工場で働かされていて、先生方も付き添われていました。戦争中ですから衛生面が悪く、ウジ虫が湧く様な環境の中で寝泊まりするので、先生は県庁や工場の上の人に何度も掛け合いに行き、終には気に入らなければ行かんでもよいか言われ乍ら、改善をさせたようです。

後日、文部省の担当者から、このようなよい環境で学徒が働けるのは素晴らしいことだと表彰されたそうです。

先生は昭和 62 年清心をご退職になり、同窓会の名誉顧問になって下さいました。同窓会はお金がなかったので、先生は色々と遺跡や美術館や古墳等色々連れて行って教えて下さいました。

先生は全く邪心を持っておられないから人を扱われるのもお上手で、誰でも先生のおことばには素直になれる不思議なお力を持っていらっしゃいました。

私は卒業以来、学校へ足を向けていませんでしたが、或る時先生に呼び出され、同窓会の監査をせよと言われ、私は数学が弱いから監査は無理だと申しましたら、監査は数学が弱いものの方がよいのだといわれ、とうとう監査を引き受け、その繋がりから同窓会長を 20 年続けました。

ただ一つ先生のおことばに従えなかったのは、「アラムネ(註・同窓会新聞)を毎年出すように。」お金が無くてそれだけは出来ませんでした。その後豊かになり、今はお言葉通り毎年発行できるようになりました事を御報告が出来ますのが嬉しいことです。

同じ里庄御出身のシスター深堀清子先生が(私は直接お教え受けたことはございませんが)、ジンバブエで長い間ご奉仕をして来られ亡くなりました。ジンバブエにシスター荒谷が行かれましたが、飛行機を乗り継いで遠かったと言われましたが、アフリカの南端の方です。そのような僻地での長い御奉仕をなされたことも大変な事です。

大都会からでなく、里庄という一地方から清明先生のような先覚者、世界に目を向けて御奉仕されたシスター深堀、改めて里庄というところは何と人に感動を与えるまちなのかと知らされました。

私も人生終わりに近づいていますが、里庄の皆様方と同じように人に感動を与える生き方がしたいものだと願っております。



アラムネ27号 (H. 11. 10. 19.)

母校の思い出

昭和23年卒 庄司志津子（旧姓 友沢）

いつの頃だったでしょうか。上伊福の校舎に龍舌蘭の花が咲きました。私は佐藤清明先生のご説明を聞きながら、百年に一度咲くというその美しい花を見上げたことを昨日のように思い出します。私達の母校も龍舌蘭ならば今、百年目の美しい花を咲かそうとしている頃でしょうか。創立百周年が・本当におめでとうございます。

私事で恐縮でございますが、清心で学んだ私の母も叔母もすでに亡くなり、今、私がこのすばらしい記念の年に出会えるということは何という幸せでございましょう。母や叔母の分まで含めて心からお喜びを申し上げます。

昭和五年生まれの私共の年代は、小学校が国民学校に、女学校が高等学校に、女専が大学にと、めまぐるしい過渡期ばかりを通り、しかもその間に戦争、空襲、戦後という未曾有の出来事に遭遇した学生生活でございました。

そのような時代ですから入学試験も面接でございました。県立の第二高女の試験の時には国語の本を出され、好きなどころを読むようにと言われて、日本海海戦の「天気晴朗にして波高し」というような軍国調のところを得々として読んで（それが原因ではなかったでしょうが子供心にまずかったかなと思っていたので）落ちましたので、こんどはおとなしく、おじぎも丁寧にいたしましたところ、「ハンケチを見せなさい」というかんたんなことで、何だか狐につままれたような試験でございました。

でもまあ無事に清心の生徒になりましたが、小学校と違ってすばらしい廊下、洗面所、教室、その中で特にすばらしかったのは、二階まで吹き抜けの講堂でございました。入試の日に講堂の二階廊下を歩いていられるシスターのお姿に目を見張ったものですが、何も彼も外国のようでございました。でも廊下は一行に、走ってはいけません。髪は三つ編みに編んで耳から一五センチ、スカートはひざ下一五センチ、大きい声でしゃべってもいけません。背の高い私は上品な階段がまどろかしくて二段ずつ上っていて、シスターに叱られたりしたものでございました。運動会の当日になってブルマーは駄目、といわれ、スカートで走ったこともございました。

戦争が次第にはげしくなり、自慢の白亜の校舎も黒々と塗られ、誰かが「あれは練兵場や師団を指しているんじやと」と、いわれた十字架も黒い箱がかぶせられてしまいました。そしてシスター・イグネシャス、シスター・マリー・ジュリーも青木、安田シスターとお呼びするようになり、和服に袴というお姿に変わられました。私も母のお古の袴で制服を作りました。それも国民服でして、私の服はご近所の方に仕立ててもらったので皆の規定のよりは衿の恰好がよいとかで賑々かなことでした。今の若い人達の流行に比べたらなんともつまましい話ですけど、どんな生活の中でも年齢相当の喜びは見付けるものですね。

校長先生は松浦俊吉先生、生物は佐藤清明先生、化学は泉谷先生、国語は橋本先生、図画は武藤先生、体育は西本、岡崎先生、社会は西尾先生、裁縫は松岡先生、料理は島村先生、理事長の辻先生にも担任になっていただいたこともございます。戦中戦後の不自由な時だけに先生方とのつながりは格別のように次々と思い出はつきません。生物の佐藤先生には、イチゴや、タンポポ、スギナを採りにつれていただき、それを食べさせられたり、また、キャラメルのようなもの一個で一日の食糧は捕える時代がくると、夢のようなお話を聞かされ、首をかしげましたが、今の宇宙食のことでしょう。今更のように先生の先見の明には驚かされています。お裁縫も洗い張りのものばかりで羽織の時など、どちらが表か裏か判らなくて、先生に叱られ、蚊のなくような声で、「こちらが表です」と申し上げたら、先生が飛び上って驚かれたこともございます。足袋も余り布で仕立てたり、わらぞうりをあんだり、岡本先生には下駄まで作られました。そのような中で、英語だけは本格的で、発音などもアメリカ式で、アルファベットもZの発音が違って、他校に行っている従妹達とよく言い合ったものでした。

音楽はオーケストラなどがあり、私も少しヴァイオリンをかじりましたが、空襲で焼けたのを機にやめました。体育に、神宮（当時の国体のようなもの）で優勝したとか言われた岡崎先生が

来られて、機械体操部を作り、力をいれられ、私もその部に入らされて、平均台の練習をしたものです。いまのウルトラC級の技に比べたら赤ん坊のようなかんたんな技でしたがいざ運動会へ出たところ、誰一人として、その平均台を渡り切る者もおらず、ひどいものになると台に上ったらすぐ落ちるといった有様で、とうとう岡崎先生が、無念そうな顔をなさってご自分の技をご披露なさったのを思い出します。

三年生になって、とうとう学徒動員で旭川河口の工場まで飛行機造りに出ました。毎朝小さな船に他の学生と屋根にまで乗り合って京橋から出ます。最初はハンマーで練習をしました。鉢巻をしめて、時には親指を打つほど力を入れてがんばりました。それまでに春は田植え、秋には稲刈り、夏休みの宿題は草刈りをして干草にし、農家へ持って行って証明書を書いてもらうというような生活でしたから、ますます勉強らしい勉強はしませんでした。

学校では、運動靴が配給になってくじをしたりした。工場に行っている時、くじ運の悪い私にはじめて洋服が当たりました。国防色の布地はよく判りませんが学年で二着ほどのものでしたので、嬉しくなって、もらって帰って、ミシンの上に置いていたまま空襲で焼きました。一度も着ていないのに代価だけを払わねばならなかったのが口惜しかったのを覚えています。

岡山の空襲で焼け出された私は、一人娘だから危いという母の言葉で、しばらく学校へも行かずにのんきに遊んでおりましたところ、「友沢さんか空襲で死んだ」という噂を従妹か聞いて帰り、これは大変とはじめて学校に出てまいりました。学校は岡山市街の惨状をよそに、何の損傷も受けずほとんどのお友達が出て来ておりました。授業も平常にもどっていたようで、外人のシスター方もぼつぼつお姿を見せて下さっていました。戦後の荒廃した岡山の地に帰って来て下さり、幼い私達に限りない愛の心を注がれたシスター方のことを思うと今更のように頭が下ります。特にシスター・エーメーには、私達の汚い言葉を心に留め、日本語の本当の美しさを教えて下さった思いがいたしております。

その他、日本語も十分お出来になられないのに、そのおおらかなお人柄で真剣に私達を教えようとして下さったシスター・クレア、大きな青い目を見開くようにして叱られましたが、私達にとって一服の清涼剤のようにすばらしく、楽しい授業でございました。国語の好きな私は、当時中学校の合同文芸誌「旭水」の編集のために橋本先生につれられて他校に行ったこともございましたが、これもシスターにとがめられて止めました。橋本先生の源氏物語に熱中した頃もございました。物資も何も彼も不自由、校則もきびしく、きゅうくつではございましたけれど、やはり青春の特権のように夢だけは大きゅうございました。国語の時間に、「将来の自分」についてそれぞれの夢を教壇に立って話しましたが、私は「医者になって、気の毒な人達を助ける」というような立派なことを申しました。今思うと汗顔の至りでございましたが、しらずしらずのうちに、清心スピリットが入っていたのでしょうか。

私達は他校との交流もなく、独自の校風の中で育てられ、時にはもっと自由が欲しいと思う人達もいたと思いますがこうしてふり返ってみますと、何も彼も一つ一つが私達を大切に大切に扱おうとされた愛の心であったと思われれます。そして、その自分に与えられた環境の中で一生懸命、まじめにがんばってきたことはすばらしいことであったと思えます。

ただ一つ心残りは修学旅行に行けなかったことでしたが、これも、級友相計り、百周年を機に、三十七年振りにやり直したいものだと思っています。卒業式にシスター・メリー・コスカが「新生はじまる」というメッセージを下さいました。今もその特別なひびきは耳の底に残っておりますが、清心で学んだ五年間は私にとって大きな宝でございまして、年と共に益々その感を深くいたしております。未熟ながらも日々、「新生はじまる」の気持ちを持ちつづけて、シスターや先生方の愛の心にお応えしたいものと存じます。

そして、このような学校こそが今の時代には必要でございまして、ますます充実して、社会に用いられる学校となりますようお祈りいたしております。

清明さんになった子どもたち

夏休み図書館講座『植物標本を作ろう』を開催して

(佐藤清明資料保存会青少年育成事業)

佐藤清明資料保存会事務局

本年度、児童を対象にした夏休み図書館講座『植物標本を作ろう』を令和元年8月17日(土)午後1時から開催しました。清明さんの植物を愛する心を里庄町の子ども達にも受け継いでほしいと始まったこの企画。15名の参加者が思い思いの植物を持って当日集まりました。

(1) 第1日目の作業

- ① 採集した植物の形をきれいに整える。
- ② 新聞紙にはさむ。
- ③ ラベルに植物の科名・和名・採集場所・採集年月日・気づいたこと・採集者氏名を書き込む。

佐藤清明資料保存会の副会長で清明さんと共同で論文を執筆したことがある里庄町在住の安原清隆さんやサポートして下さる佐藤清明資料保存会の皆さん達と植物辞典を見ながらどの植物かを探します。そしてラベルを記入。最後にいよいよ標本乾燥機に入れて完成です。約40時間乾燥機に入れました。



(2) 第2日目の作業

後日、乾燥機から取り出した標本を台紙に貼るとともに、ラベルを貼り付け、ビニール袋をかぶせて完成です!

道ばたに生えている時はかえりみられない雑草が、植物標本になると色もほとんど退色することなく、美しい姿になることに、参加した子ども達は驚き、「きれいだね」と大満足でした。



(3) 「植物標本を作りました!展」の開催

植物標本を作っただけではもったいないというご意見から急遽9月から1ヶ月間図書館1階フロアで植物標本の展示会を行うことになりました。植物標本を目にすることは普段少ないせいか、図書館を訪れた方達は興味深そうに見学される方が多かったです。植物を愛した清明さんの活動を次世代に受け継ぐため、来年も開催したいと思います。

(里庄町立図書館主査 小野礼子)

<編集後記>

前号までに、植物採集に同行された方々、先輩と共に理科教育に邁進された同僚の先生、家族として晩年の生活をお支えになった方から、佐藤清明のお人柄を偲ぶ文をお寄せいただきました。

4号では、教え子として「清明先生」から学び、後に同窓会会長として佐藤清明と共に同窓会と母校の発展に心を尽くされた庄司志津子様にご登場いただきました。博物学者佐藤清明の業績は、お人柄と生き方とリンクしていることをあらためて感じさせていただきました。

巻頭論考と併せてご用意頂いた「岡山博物同好会 30年の歩み」は、同人誌がガリ版からタイプ印刷に移行した時期の刊行物であることを考え、コピーして掲載いたしました。読みづらいですが発行当時の時代背景に思いを馳せていただければ幸いです。(会報担当・佐藤泰徳)

佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No. 4

発行日 令和元年12月21日
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 中尾茂男

住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.sl.net.town.satosho.okayama.jp>

Eメール : slnet@sl.net.town.satosho.okayama.jp